極彩色虚言泡沫絵巻

彩宮菜夏

序章

放課後、雫はおもむろに下駄箱の蓋を開けた。すると靴の上に、可愛らしい封筒がちょこんと載せられている。表には丸文字で、こう書いてあった。

「御剣 雫様へ♥」

手に取るなりがっくりと肩を落とした雫は、重いため息をついた。トレードマークの長いポニーテールが、頭の後ろでくたりと垂れる。

「まただ……」

やるせない気持ちで雫が脱力していると、急にどこからか脳天気な声が聞こえてきた。

「しーずくっ。何見てーんの」

そしてどこからともなく現れたクラスメイトの矢倉亜里砂は、雫の背後から覗き込むなり、素早くその封筒を奪った。そして遠慮会釈もなく吹き出す。

「まーた一年生からラヴレターもらったの？　これ何通目？」

「今月で四通目……」

「もう諦めて付き合ったら？」

「四通とも相手が違うの。それに、私も相手も女」

「だからその辺も含めてそろそろ諦めたら」

「……まだ中二なのに諦めたくない！」

決然と言い放った雫は、亜里砂から封筒を奪い返す。

そして竹刀と鞄を肩にかけると、校舎の外へと颯爽と駆けだした。

校庭からはブラスバンドの練習する音、野球部の打撃練習の音が響いてくる。雫の青々としたセーラー服のスカートは、まるで若桜のごとく輝かしくなびいていた。

まだ早春、うららかな日差しが心地よい時分の話である。

「二年生にして女子剣道部主将、男っ気ゼロの清潔感溢れる凛々しい顔立ち、おまけに生真面目かつ成績優秀な優等生と来たら、そりゃあうら若き

乙女がオチても仕方ないって。むしろアタシがいただきたいぐらいだもん。ウへへ」
「……冗談でもやめて。教室でもヘンな視線感じるんだから」
――建て売りの家々が連なる、郊外の素っ気ない町並みの中。
兄からのお下がりである古ぼけた自転車を漕ぎながら、雫は苦々しく顔を顰めて身震いをした。げんなりする。
すると雫のそんな言葉を聞いて、亜里砂は隣で可笑しそうに肩を揺らした。
「だから、そう言うんだったら彼氏の一人ぐらい作ったらいいじゃない。大体雫って、男から見たら近寄りがたいんだって。ただでさえそんじょそこらの男じゃ敵わないくらいの完璧超人なのに、その上廊下歩いてても、険しい顔で背筋伸ばしてキビキビしてて、ほとんど侍」
「険しい……かな」
「どこぞの暗殺者かっていうくらい険しい。髪も地味なピンで留めておでこ出して、後ろはゴムで一本結び？　ホントに侍じゃん」
「だって、鬱陶しいから」
「もっとさー、ニコッてしたらいいんだって。ニコッと可愛く。男子なんてそれだけで簡単に喜ぶの。そして騙されるの。ね？　雫は素材はいいんだからさー」
笑顔笑顔、とお気楽な声を上げると、亜里砂はハンドルから両手を放した。波打つアスファルトに揺さ振られ、荷台の鞄がガタゴトと音を立てる。
「うー……じゃあ、はい、笑顔」
雫は少し考えると、亜里砂に向かって渾身の笑顔を作ってみせた。
――静かな時間が流れた。
亜里砂は、切なげな目付きをした。
「……また今度にしようか」
「はい……」
そうして二人はしばらく、黙ったままで自転車を走らせていた。春の薫りのする柔らかな風が、二人の間をふわりと抜けていく。
やがて、錆び付いた踏切の前まで辿り着いたところで、雫は急に自転車を止めた。驚いた亜里砂は、何事かと雫の顔を見る。

「え、どしたの？」
「ごめん、ちょっと私、今日はお祖父ちゃんの手伝いがあって」
「あーあの美術館の？　よくやるねー。あたしだったら無視して逃げ出してるけど。んで、今日は何の用なの？」
「よく知らないけど、また新しく絵巻物を手に入れたから、それを展示する手伝いをしてほしいって……」
「またぁ⁉　てかそーだよね、雫ってお金持ちのお嬢様でもあるんだよね。お祖父ちゃんが個人美術館やってるんだから。色々と凄すぎて忘れてたわ。そしてそれなのにイヤミがないっていうのが、あんたの一番いいところだ、うん。まあ、頑張って。あたしは手伝わないから」
「別に期待してない。手伝いって言っても、ほとんどお祖父ちゃんの長話聴くのが仕事みたいなものなんだけど」
　そう言って肩を竦める雫に、亜里砂はうぇーと言って舌を出した。
「それってアレでしょ？　これの由来は何でござい、あれの作者は誰でござい、って。前連れてってもらったとき来世分まで堪能したけど。あれ孫相手にもおんなじことするの？　大した爺さまだわ……」
「んー、でも、私も嫌いじゃないから」
「あそっか、雫日本史凄いもんねー、先生が雫にお伺い立てるくらいなんだから。あれもお祖父さんのおかげなんだ。さすがだねー偉い偉い」
　そう言われて照れた雫は頭を掻いたが、しかし何やら、話が不自然なような気がした。普段の亜里砂なら、もっとやたらに毒づいているところである。大体どれもこれも、亜里砂ならとっくに知っていることばかりだ。さっきから妙に雫のことを持ち上げてくる。おかしい。
　そんなことを考えて怪訝な顔をしている雫をよそに、亜里砂は、ほんじゃあたしはもう行くわー、と言って、ニコニコと笑った。やたらニコニコしている。やけに上機嫌である。そして、亜里砂が上機嫌なときはろくな事がない。雫は厭な予感がした。
　にんまりと笑みを浮かべた亜里砂は、ほんじゃ、と言った。
「また明日ー……あ、そうそう」
「何？」
「いや、いつ言おうかってずっと思ってたんだけどさ」

「うん」
「言いにくいことなんだけど……あのね」
深刻そうな顔つきでそう言うと、亜里砂は雫の耳元にそっと口を寄せる。何かあったかと不安になった雫は、そのまま黙って彼女の言葉を待った。
亜里砂は存分に溜めると、こう言い放った。
「……あたし、Ａカップ同盟抜けるわ。んじゃね～」
「……う、裏切り者ぉおおおお！」
突然の告白に一瞬固まった雫は、急いでそう叫んだ。しかし亜里砂は、ワハハハハハと豪快に笑いながら、悠々とその場から走り去っていく。
わなわなと震える雫は、何も出来ないまま、彼女の後姿を見送った。
――こうして、同盟の構成員は一人になった。
後に残された雫は、とりあえず繰り返し深呼吸をして、何とか心の動揺を収める。それからおもむろに、自分の胸をさわさわと撫でてみた。
そうして再び、腹の底から深々とため息を漏らした。
トリプルＡの雫が卒業する日は遠い。

「自分で作っておいて先に脱退するってどういうことよ……」
ぶつくさ言いながら、雫は美術館の無駄に立派な玄関門をくぐった。
傍らの門柱には、『御剣（みつるぎ）江戸美術館』と彫り込まれた、ご大層なブロンズの板が掛けられている。今日は月曜で休館日だが、別に開館していたところで客など入って来ない。松や梅の植わった風雅な庭園を抜けると、そこが本館である。
雫が足を踏み入れると、途端に中から呼び声が飛んできた。
「おお雫、やっと来たか。ほれこっちじゃこっち」
白髪に白髭、藤色の着物を着た老人が、薄暗い美術館の奥で嬉しそうに手招きをしている。これが雫の祖父、御剣新右衛門（しんえもん）である。
この大仰な名の老人は、長年有名銀行の重役を勤め上げた後、かねてからの夢であった個人美術館を開館した。名は体を表すということか、彼は若い頃から江戸時代の浮世絵や読本といった美術品を好んで収集していた変わり者の趣味人であり、この美術館も結局のところ、そうしたコレクションを他人に見せびらかすための場所なのである。

肩から鞄を下ろすと、雫は手近なソファへどっかと腰を下ろした。広々とした部屋のぐるりには、掛け軸やら襖絵(ふすまえ)やらが、所狭しと展示してある。美術品を傷めないよう天井からは弱く柔い光が向けられていて、それが美術館独特の、あの静かでどことなく幻想的な雰囲気を醸し出していた。

半目になった雫は、重々しく口を開いた。

「それで？　今日はなんだっけ？」

「なんじゃ、無愛想じゃの。わしがせっかく呼んでやったというに」

貧乳地獄のせいで仏頂面の雫に向かって、祖父はわざとらしく口を尖らせる。この「じゃ」とか「わし」とかいうマンガのような老人口調も、わざと使って楽しんでいる節がある。

「今日は、お祖父ちゃんが若い時分からずーっと欲しかった一品が、ようやく手に入ったもんでの。展示の手伝いついでに雫にも拝ませてやろうという、まあ祖父の親心じゃな」

「祖父の親心……？」

分かるような分からないような言葉に、雫は首を傾げた。しかし祖父は一向気にせず、こっちの部屋じゃ、と勝手に言って、鼻歌交じりに奥の展示室へと歩いていく。仕方がないので雫も竹刀を肩に掛けたまま、その後へ億劫そうに続いた。

行ってみると、案内されたその奥の部屋はいささか狭く、展示品の数も他と比べると少なかった。どうやらコレクションの中でも特に珍しい、自慢の品を並べるための場所らしい。

雫の姿を見て、祖父は肩をすくめた。

「なんじゃ、竹刀なんか置いてくればいいのに」

「剣士はその辺に武具をほったらかしにしたりしないの」

雫は生真面目に応える。そうして祖父に導かれるまま、部屋の一番上座(かみざ)に新しく据えられた、小綺麗な展示台の下へ向かった。

台の上のその「一品」を見て、そこでようやく雫は、眼を見開く。

誇らしげに笑みを浮かべた祖父は、胸を張って言った。

「ほれ、これじゃ！」

「これは……」

それは、一巻の絵巻物であった。

展示台の上にだらしなく広げられたその大振りな巻物は、部屋にある他の品と比べると、いささか年代が新しいように見えた。

部屋の薄暗い照明の下であっても、隅々まで描き尽くされた鮮やかな絵の美しさはよく分かる。祖父のおかげで少なからぬ数の江戸絵画を目にしてきた雫であったが、今目の前にあるこの作品が、その中でも群を抜いていることは、はっきりと分かった。

江戸の町並みを、空からの俯瞰で描いている。遠方には大きく美しい富士が聳え、手前では、まるで細密画のように描き込まれたありとあらゆる江戸の風物が、隅々に至るまで目を楽しませてくれている。

侍、町人、商人、艶やかな着物姿の娘たち、そしてあどけない子供たち。その素振りから表情に至るまで、細かに忠実に記されている。背景の風景や静物も、まるで写真のように緻密でありかつ巧みであり、のみならず、独特の味わいまでも漂わせる。

そしてそれらの全てが、一つ残らず絵の具で丹念に色付けられていた。小物の一つ、草葉の一枚に至るまで、慈しむように丁寧に、そしてたおやかに描き出されている。生き生きと今にも動き出しそうという形容が、何よりも相応しかった。

思わず雫も息を呑み、ただじっとその絵に見入った。

「……すごい」

「これこそが、極彩色虚言泡沫絵巻じゃ。江戸末期から明治初期にかけての最後の浮世絵画家、歌方雅楽が描き残した、畢生の大作」

「雅楽？　聞いたことない……」

「うむ、日本画壇では未だに無視されておる、異端の画家じゃ。画楽とも、画楽多とも号しておるな。彼は元々商家の生まれじゃったが生来身体が弱く、そのため生涯、江戸の町を出ることは叶わなかった。じゃが一方で、黄表紙読本浮世絵歌舞伎、浄瑠璃芝居に絡繰仕掛けと、娯楽という娯楽に目がなかったのじゃ。ろくに働きもせずこうした諸々のお楽しみに日々せっせと手を出しては喜んでいたという生粋の」

「ダメ人間」

雫はまだ不機嫌である。
「道楽者じゃ。まあその中でも絵描きの方に才があったらしく、細々したスケッチのような物は残っておる。一代の碩学で、江戸でもちょっと名の通った知識人じゃったようじゃしな。じゃがこれといってまとまった作品はないまま晩年に至り、そして、かの維新が起こった。動乱に巻き込まれて大変ではあったが、雅楽は何とか生き延びて、明治の御代を見届けたんじゃ。この時齢既に米寿に近い」
「身体弱かった割に長生きだったのね」
「図太く生きれば案外人間何とかなる。するとここに至って何を思ったか、突如として雅楽は、それまで素振りも見せなかった大作の制作を始めた。この時代誰も目を向けなかった絵巻物などを、全身全霊を傾けて描き出したのじゃ。かくして、余生の全てを注ぎ込み、この傑作は誕生した」
祖父の言葉にふうん、と雫は相鎚を打ち、今一度絵を見やった。幾度見ても凄みすら感じさせる、圧倒的な出来映えである。
そうするうち次第に不思議に思えてきた雫は、首を傾げた。
「変わり者だったのは分かったけど……でもこれだけのものだったら、もっと有名になっていてもいいような気がする。北斎とか豊国にも見劣りしないと思うな」
祖父の趣味の所為で、雫も十四歳の女の子らしからぬ渋い知識を身につけてしまっている。それを聞くと、祖父はうんうんと頷いた。
「ま、端的に言えば……趣味に走りすぎたんじゃな」
「趣味？」
「ほれ例えば、この辺りを見てごらん」
そう言うと祖父は、巻物の半ばほどを指さした。雫は眉間に皺を寄せる。
全身を黒服に包んだ見るからに怪しげな人物が、宿屋の屋根の上に乗って、しきりに辺りの様子を窺っていた。
「……これ、忍者？　江戸の町に？　それも、こんな分かりやすい格好で？」
「どう考えてもおかしいじゃろ？　それからこっちも」
「これは……妖怪、だよね。大入道？　あ、こっちにも。あそこには、鬼？　こっちには、空に凄い大きな鳥が描いてある……」

「町の外では、甲冑着た武者たちが馬に乗って合戦をしとるな。江戸時代じゃのに」
「わ、絡繰り人形が何体も描いてある……と思ったらここには綺麗なお姫様の見返り姿が……こっちには、これは美少年剣士、かな。斬り合いしてる。あれ、ちょっと待って。こっちでは青々とした葉っぱが樹に付いてるのに、こっちでは紅葉になってない？　え？　あれは雪？　月と太陽が並んで、え？　え？　あれ？」
　見れば見るほどに、雫は混乱した。時代は滅茶苦茶、内容に一貫性は全くなく、季節さえも場所によって異なっている。現実的な場面と幻想的な場面も分け隔てなしに、画風（タッチ）すら必要に応じて変化させ、気の赴くままに描かれていた。なまじ時代と風俗についての知識があるせいで、雫は戸惑うばかりである。
　仕舞いに顔を上げ、雫は問うた。
「何これ」
「じゃから、未だに無視されておるんじゃ。写実画でもなく空想画でもなく、ただただ好きな物がつらつらと並べて奔放に描かれておるだけ。雅楽の好んだ物語に出てくる、泡沫（うたかた）の如き虚言（そらごと）が、ごたまぜになって極彩色で描き出されておる。一応読本のように筋立てはあるようなんじゃが、文字になって残っておらんから、今となっては誰にも分からん。絵巻と題されてはおるものの、実のところジャンル分け不能の総合芸術、頭の固いボンクラ学者連中の度量を越えとるんじゃな。結局これだけの作品でありながら、誰も評価しとらん。仕方ないからわしが貰い受けたというわけ」
　得意げにそう言う祖父に生返事をしながら、雫はもう一度、頭から絵巻を見返した。江戸の町の外には、明媚な自然の情景が、水墨画のように迷いなく力強い筆勢で描かれている。
　絵に見入る孫娘に向かって、祖父は恐る恐る尋ねた。
「……気に入ったかの？」
「まあ……嫌いじゃない」
　素直でない性格の雫にとってはそれが、大いに気に入った、という意味になる。祖父は嬉しそうに微笑んだ。
　顔を上げた雫は改めて、肩をすくめて訊いた。

「それで、私は何を手伝えばいいの？　絵巻物一巻きを展示するだけならお祖父ちゃんでも出来るじゃない」
「いやいやいや。この絵巻をここに置くということはじゃな、この部屋全ての品の配置にも関わってくるということじゃ。全体のバランス、組み合わせ、その辺も館長たるわしのセンスが問われる。ここにこれを置いたらあそこに甲冑があるのは具合が悪い。あちらに馬具が見えるのはよろしくない。並べ替えねばならん。そんなわけで、力自慢の強力(ごうりき)雫に出馬を願った」
「人を金太郎みたいに呼ばないでください」
雫はむっつりと口を真一文字に結ぶ。とはいえ、学校一の力持ちであることは事実であるから言い返しにくい。一年生の時の文化祭の企画で腕相撲勝負をやったところ、すまし顔のまま来賓の柔道選手まで一人残らず負かしたため、最近ではクラスの男子から「魔人」と呼ばれるまでに至っているのである。
「まあそう言わず。それじゃあお祖父ちゃんはちょっと事務室で用意してくるからの、ちょっとここで、待っていておくれ」
そう言うなり、返事も待たずに祖父は展示室から去っていった。浮き足だったその後ろ姿を見て、雫は軽く頭を掻く。どうにも物を断れない性分なので困ってしまう。
そうして雫は、静かで仄暗い展示室に一人で残された。
再び傍らの絵巻へと目を戻す。ぼんやりとした灯りに照らし出された細緻な絵は、どこかうねるような、奇妙で妖しい力強さを感じさせた。雫はじっと、それを見つめる。
今にも、その世界に取込まれそうになるほどだった。
(……一体何を思って、こんなもの描いたんだろ)
ふと雫は、そう不思議に思った。これが並大抵の思い入れでないことは、一見して雫にも分かる。雫の知る限り、明治時代ともなると外国から入ってきた文物が俄(にわか)に持て囃されて、江戸時代の版画や浮世絵などは、まるで塵紙のようにぞんざいな扱いを受けたはずである。無論注文など来ようはずもない。ならばその歌方雅楽なる画家は、わざわざ自分の趣味でこんな手間暇かかるものを描いたことになる。

一体何のために、描いたのだろうか。
(信じられないくらい心をこめて描かれてるな。でも、病的な怖さとか、凄みとかはないか。というより、何だか……)
考え考え絵巻を眺めているうち、雫は気づいた。
町の外、小さく描かれた竹林の中に、一人の影がある。
――それは、少年だった。
歳も雫と同じくらい、元服も済ませていない、年若い少年の姿である。
稚気に満ちた愛らしい顔立ちで、人気(ひとけ)のない池の端(はた)の岩にぽつりと一人で腰掛け、一心に何かをしている。
「なんだろ……」
気になった雫はそこに、顔を近づけた。
すると。

その少年が、ふいとこちらを見た。

「……え?」
何かの見間違いだろうと、雫は目を擦る。
そんなはずがない。薄暗い部屋だからぶれて見えたか、光の加減で錯覚したのだろう。画が独りでに動くなど有り得ない。そう思う。思うが、しかし、
しかし間違いなく――彼と目が合っている。
雫は、目を逸らすことが出来ない。
「あれ……?」

波打つように絵巻が蠢(うごめ)く。
天地が淡き光を放つ。

所狭しと描き出された人、物、妖怪(あやかし)、自然の全てが、まるで生命(いのち)を得たかのように、縦横無尽に動き始めた。

雲は揺蕩(たゆた)い草木は靡(なび)く。

陽光(ひざし)は濯(そそ)ぎ、水面(みなも)は流れる。
どこからか夏の熱っぽい風が吹き、雫の頬を、優しく撫でた。
人々の生き生きとした喧騒(ざわめき)、飛鳥(ひちょう)の鳴く声、柳のそよぐ音。
無音のはずの部屋の中で、それらが確かに、雫の耳に聞こえてくる。

「うそ……」

紙に塗りつけられた顔料(えのぐ)に過ぎなかったはずの何もかもが、無限大の広がりを持って、雫を包み込むように迫ってくる。
美術館の暗い部屋は最早雫の目に入らず、絵巻の世界が、目前の全てとなる。
現(うつつ)と夢の別は失くなり、実(まこと)と虚(うつろ)が反転する。
そして、

そして視界が、
ゆらり、と歪んだ。